

■蓮田善明 実践的文筆家。戦前の浪漫派を代表する一人で、三島由紀夫を世に出し、その精神的な“師”になった。

はすだぜんめい

日露戦争始・1904= 熊本県鹿本郡植木町で、金蓮寺(浄土真宗大谷派本願寺末寺)住職蓮田慈善の三男に生まれる。母はフジ。

日露戦争終・1905= 1歳:

文武両道の豪僧で、征韓論が起きた際、陸軍士官生の募集に応じ、結果として、西郷軍と戦い、負傷免官して住職を継いだ後も、在郷軍人会に重きをなした硬骨のナショナリストだった父慈善の血を受け継ぐ一方、苛烈な気性の父が子供たちに強く当たるため、家庭内の紛糾が絶えないことに、末っ子(上に2兄・2姉がいた)として、心を痛めて育ち、

大逆事件判決1911= 7歳: 植木尋常小学校に入学、神風連の精神的中核だった林桜園が尊崇した杵築神社宮司の息子と親友に。

明治天皇没・1912= 8歳:

大正政変・1913= 9歳:

ロシア革命・1917=13歳: 卒業し、熊本県立中学済々齋に入学。文学に目覚め、級友と回覧雑誌《護謨樹》を作り、短歌などを発表。本格政党内閣1918=14歳: 翌年にかけて、肋膜炎のため休学。

教員で、神風連幹部の息子で、のちに「神風連血涙史」を著す石原醜男の話からも影響を受けたりするが、折からの大正デモクラシーの流れに乗って、モダニストで自由主義者になって行き、

原敬首相暗殺1921=17歳:

水平社結成・1922=18歳:

関東大震災・1923=19歳: 卒業し、広島高等師範学校文科第一部(国語漢文専攻)に入学、教授の斎藤清衛から強い感化を受けて、古典に傾倒し、文芸部理事として校友会誌《曠野》を編集、自らも小説・詩・評論を発表して文名を高める。

治安維持法・1925=21歳: 《曠野》誌上で、見立てを重んじる古今集を称揚し、

円本時代始・1926=22歳: 機知に富んだ詩「植物出展(習作)」を書くなど、ロマン派からはほど遠い位置にいたが、

金融恐慌・1927=23歳: 広島高師を卒業すると、自ら志願して、鹿児島歩兵第45連隊に幹部候補生として入隊し、

共産党事件・1928=24歳: 郷里植木町の医院の娘で幼馴染の師井敏子と結婚。1年で除隊後、岐阜県立岐阜第二中学校教員となり、

世界恐慌・1929=25歳: 長野県立諏訪中学校へ転任後も、美男で生徒の自由を重んじる人気教師だったらしいが、

海軍軍縮条約1930=26歳: 長男晶一が誕生、自らの体験から、家庭を愛の小世界にしようと努めて行く。

満州事変・1931=27歳: 中央公論社に投稿した論文が突き返されたことに、学問的未熟さを痛感して奮起、

五一五事件・1932=28歳: この年、《コギト》が創刊される。教職を投げ打って、広島文理大学国語国文学科に入学。

国際連盟脱退1933=29歳: 広島高師で文芸部の後輩だった清水文雄、栗山理一、池田勉と共に研究紀要「国文学試論」第一輯を刊行。

帝人獄事件1934=30歳: 師斎藤の紹介で、種田山頭火と出会い、放浪実践に感激。初の著書「現代語訳古事記」を刊行。

芥川直木賞始1935=31歳: この年、保田與重郎が中心になって《日本浪漫派》創刊。卒業すると、勉強が過ぎて再発した肋膜炎の療養と奨学金返済のため、あえて台中商業学校の教師となり、妻子を連れて、台湾に移住、

二二六事件・1936=32歳: 次男太二が誕生。堺の栗山理一宅で、伊東静雄に出会い、互いに共感するなど、浪漫派に急接近、

日中戦争始・1937=33歳: 文部省が「國体の本義」を出した頃には、まだ、ゆとりがあつたが、

健保+総動員 1938=34歳: 「本居宣長に於ける“おほやけ”的精神」「伊勢物語の“まどひ」」を発表。父慈善(続いて母フジ)が死去したことから、*清水文雄の後任の形で、自由主義的な学校の代表成城高等学校教授へ転任し、東京都世田谷区に移住。清水、栗山、池田と共に《日本文学の会》を結成し、月刊誌《文藝文化》を創刊、「万葉末季の人」を発表し、以後、ここを本拠に自由な文筆活動。《コギト》、《日本浪漫派》と並ぶ雑誌として、日本浪漫派の一翼を担うようになる。かつて幹部候補生だったため、熊本歩兵第3連隊に陸軍歩兵少尉として応召(始めから士官の教育訓練を課す立場で、火野葦平のように課される側の民衆体験を欠くことになる)。「青春の詩宗～大津皇子論」を書いて、「死なねばならぬ」意識に目覚め、

第二次大戦始1939=35歳: 三男新夫が誕生。「新風の位置～志貴皇子に捧ぐ」を発表後、家族を植木町に帰住させ、中支戦線へ赴き、湖南省洞庭湖東部の晏家大山の守備につく。陸軍中尉に昇進後、右腕に貫通銃創を負い、一時野戰病院に入院。「詩のための雑感」を発表。文藝文化叢書として「鵠外の方法」を刊行。

大政翼賛会・1940=36歳: 「詩と批評～古今和歌集に就いて」発表後、召集解除となり、植木町に帰還した頃には、

日米開戦・1941=37歳: 一気に偏狭・過激化した文部省の「臣民の道」に呼応するように、*自由主義的な思想は全く消えてしまう。文藝文化叢書として「預言と回想」を刊行。阿蘇垂玉温泉の旅館に滞在して、思想的萬華示す物語のような小説「有心」を執筆するも完結できず。單身上京して、成城高等学校へ帰任後、家族を世田谷区の住居に迎える。伊豆修善寺温泉での《文藝文化》編集会議で、清水文雄から学習院中等科の生徒が三島由紀夫名で書いた「花ざかりの森」を見せられ、まさに自分たちの文学の血脉を体現する天才と認知、

1942=38歳: 日比谷公会堂で開かれた日本文学報国会発会式で記念講演「古典の精神による皇国文学理念の確立」を行う。早速《文藝文化》に連載して、熱烈に推奨、出版の手筈にも尽力。この間、精力的に執筆を続け、

創価学会検挙1943=39歳: *「本居宣長」「鴨長明」「神韻の文学」「古事記学抄」と代表作を次々刊行するが、すでに、宣長の“たをやめぶり”から賀茂真淵の“ますらをぶり”に意識変革は完成、保田與重郎をさしおいて、きっぱりと“死なねばならぬ”と言挙げするに至る。再度応召となり、豪北派遣第46師団歩兵第123連隊第3中隊(中隊長は鳥越春時大尉)の第1小隊長を命ぜられ、妻子を連れて皇居参拝、広場の玉砂利を形見分け、《文藝文化》同人の送別会後、途中大阪駅で、見送りに来た伊東静雄に、黄菊を一枝と詩集「春のいそぎ」を献呈、南方戦線に赴く。

年金+総武装 1944=40歳: 「忠誠心とみやび」「花のひもとき」刊行。ジャワ島スラバヤで邂逅した佐藤春夫に1冊の歌帖「をらびうた」を託し、小スンダ列島のスンバ島に転進、荒地を耕して自活しながら守備。子供たちに遺書のような葉書を出す。《文藝文化》は雑誌統合政策のため、「をらびうた」を発表した第7号で終刊となった。

敗戦・1945=41歳: *退却ためスンバ島を出帆し、シンガポールに上陸。新たに編成された迫撃砲兵一個大隊の中隊長に任命されたが、敗戦となる。聖断を受け付けることができず、変節した国家と民衆を代表するような連隊長中条豊馬大佐に耐えられず、彼をジョホールバルの連隊本部玄関前で拳銃で射殺して、自決。

中学校済々齋の時に出した回覧雑誌《護謨樹》にちなむように、シンガポールのゴム林に埋葬された。